表1

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

www.fwab.jp

Voice of friends

NEWSLETTER

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー ニュースレター
ボイス オブ フレンズ vol.31

© Karl Grobl

contents

- 外来患者100万人を迎えて
- 現地からのニュース
- 赤尾和美看護師「今月の出来事」から
- 活動報告
- 「知ってる？ カンボジア！」投資編
- 事務局より

2012年 春・夏号　認定NPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN

News

アンコール小児病院の患者数がのべ100万人を突破しました！

100万人目のかわいい患者さん

1999年2月22日に開院したアンコール小児病院（AHC）は、2011年12月20日、のべ100万人目の患者さんを迎えました。開院当初は、海の物とも山の物とも知れない何か、とでも思われていたのか、診療を受けに来る患者さんはごくわずかでしたが、12年で100万人！貧しい家庭だけでなく、経済的に豊かであっても「あえてAHCを選んで来た」という患者さんが大勢いました。確かな医療技術と、あたたかな心遣い、清潔感など、スタッフが努力し、積み上げてきたものが、これだけ多くの方々の来院につながったのだと思います。そして、そのような病院へと育てていただいたのは、多くの方のご支援のお力です。どうもありがとうございました。よりいっそう信頼される病院となるよう、スタッフもますますやる気を出しているようです。これからも応援いただきますよう、お願いいたします。

ダン・ビボル（看護教育部 コーディネーター）

私は、病院開院当時よりアンコール小児病院（AHC）で働いています。そして今、開院の日には、たった14人の患者さんしか治療を受けに来なかったことを思い出していました。あの頃は、その12年後に、のべ100万人目の患者さんを迎えることを想像もしていませんでした。AHCの成長と共に時間を過ごし、多くの患者さんの命を救うことに貢献できたこと、そして、小さな病院が、カンボジア国内の医療従事者や地域の人々に広く知られるようになったことにとても誇りを持っています。

ヘング・パヌーン（入院病棟看護師）

私は2006年にアンコール小児病院で働き始めました。「のべ100万人もの患者さんを治療した病院」という家族の一員でいられることをとても光栄に感じています。アンコール小児病院は、この100万人の子どもたち全てに愛と思いやりを提供し続けていると思っています。

ネム・ヌンスレイ（外来看護師）

私は、2002年3月からアンコール小児病院で働き始めました。私は、AHCで働いていることにとても誇りを持っています。AHCは、多くの子どもたちへ質の高いケアを提供すると共に、最高の思いやりを持ってそのケアを提供していると確信しています。

サス・サイングナン（救急・集中治療室看護師）

私は、救急と集中治療室で働いています。2005年から看護師として働いていますが、AHCで病に苦しむ子どもたちのために働けることに、とても満足しています。のべ100万人の患者さんを迎えたことは、私たちにとって大きな達成であると思います。これからも自分の持っている知識、技術をフルに使い、カンボジアの子どもたちに最高のケアを提供していきたいと思います。

アンコール小児病院（AHC）スタッフ数

カンボジア人スタッフ

・医師	42人
・看護師	115人
・理学療法士	4人
・麻酔科	3人
・メディカルアシスタント	7人
・薬局	7人
・臨床検査	11人
・ソーシャルワーカー	3人
・プレイスペシャリスト	2人
・PLWHAカウンセラー	7人
・総務	88人
・広報・フレンズセンター	5人
・CBHEPスタッフ	17人
・サテライトクリニック	32人
（医師2人、看護師20人、総務10人）	
計	343人

外国人スタッフ

・医師	2人
・看護師	4人
・総務	3人
・英語教師	1人
計	10人

合計 353人

News

アンコール小児病院現地化に向けての取り組み

アンコール小児病院（AHC）を開院した当初、「10年後には、現地の人たちの手に運営をゆだねる」というのが目標でした。合い言葉は「カンボジア人による、カンボジア人のための病院」です。ところが10年経った時、様々な問題が解決せず、現地化はもうしばらく様子を見ながら進めようとの結論に至りました。そこから3 年。ついに、現地化に向け、大きく前進します。

2011年10月6日・7日 の2日に渡り、AHC自立のための第1回会議がシェムリアップで開催されました。会議のメンバーは、フレンズUSAとJAPANの理事、カンボジアの保健医療専門家、AHCスタッフ、支援者など。それぞれの立場からのプレゼンテーション、今後の計画、自立運営委員会の発足とメンバー選出など、盛りだくさんの内容が話し合われ、情報と意識を共有する会議となりました。2013年1月を目標に、AHCの現地化が具体化することを目指し、動き出します。

ただし、現地化した後も、フレンズは引き続きAHCへの支援を続けることが決まっていますので、変わらぬご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

2012年3月末までの患者統計

・外来患者総数	（1999年～）	1,037,799件
・入院患者件数	（1999年～）	33,871件
・重症入院患者件数	（2001年～）	6,398件
・軽症入院患者件数	（2001年～）	10,904件
・救急外来件数	（2000年～）	123,019件
・手術件数	（1999年～）	15,017件
・訪問看護件数	（2001年～）	22,598件
・歯科治療件数	（2000年～）	154,569件
・眼科治療件数	（2002年～）	32,276件
・臨床検査件数	（2001年～）	514,886件

※救急外来件数は2010年10月からトリアージの数を含みます。

蒲池賞授賞式

社会医療法人財団池友会会長 蒲池真澄医師が創設してくださった【功労賞】の授賞式が、開院13周年の式典に合わせて行われました。

この賞は、1年に1度、すべてのAHCスタッフの中から、スタッフ自身による投票で選ばれた者に与えられる名誉ある賞です。今年の選考基準として掲げられたのは「ハードワーカーであること」「心のこもったケアを提供していること」。どちらもAHCスタッフなら誰もが実践していると思われますが、その中でもとりわけ優秀だったのは誰か!?ということに注目が集まりました。

厳正なる投票の結果、選ばれたスタッフは8名。共に働く仲間たちから選出された受賞者たちは、どの顔も誇らしげです。毎年、自ら賞を授与してくださる蒲池医師が今年は欠席されたため、受賞者には新上三川病院 大上院長より賞状と賞金が手渡されました。

祝福を送る他のスタッフたちは、来年は自分が受賞できるようにと、意欲を燃やしている様子。この賞が、スタッフのモチベーションを大きく引き上げているのは確実です。素晴らしい賞をつくっていただいた蒲池医師に、改めてお礼申し上げます。

パナソニックのソーラーランタン寄贈

パナソニック株式会社より、カンボジアにソーラーランタンを寄贈したいのとお話があり、地域医療支援・保健教育プログラム（CBHEP）での活動や、AHCが支援している孤児院などに60台を寄贈していただき、3月に現地で贈呈式が行われました。

CBHEPでは、村のお母さん対象に早朝のクッキングクラスを実施しており、まだ夜明け前の暗いうちに調理を始めるので、早速ソーラー・ランプが大活躍です。

また、バッタンバンの孤児院では、マッシュルームの培養のために、夜間6時間かけて蒸しあげる作業を真っ暗な中で行っていましたが、ランタンが来たのおかげで作業の効率が上がり、大変喜んでいます。ありがとうございました。

ランタンの使い方を教わる村民

入院中のアート君

アート君が住んでいるのはシェムリアップから200キロ以上も離れたコンポントムという州です。アート君と5歳のお兄ちゃんは同じような症状が4日間も続き、家族は近所の個人開業医へ連れて行きました。

しかし、薬を処方されたものの症状は良くならず、アンコール小児病院（AHC）まで行くことを決めました。とにかく急いでAHCへと個人の車を所有する運転手さんにお願いしたところ、100ドルもかかると言われました。貧しいアート君の家族はそれほどの大金は持ち合わせていませんでした。それでも、どんどん悪化している2人の子どもを前に「命には代えられない・・・」と、同じ村の中に住む人々に借金をしてその交通費を工面しました。

アート君はAHC到着後直ぐに、デング熱と肺炎がもとで体中にバイ菌が蔓延している敗血症と診断され入院、治療が開始されました。しかし、アート君のお兄ちゃんの体力は長旅を乗り切ることができませんでした。AHCへの途中の車内で亡くなってしまったのです。

この話を聞いたある家族（やはりAHCへ子どもを連れて来ていたカンボジア人の家族）が、この話に大変心を動かされました。そして、借金をした100ドルの交通費分を寄付しますと申し出をしてくれました。このご家族の好意はアート君の家族にとって、経済的な負担と共に、精神的な負担を大きく軽減させてくれたことはいうまでもありません。そして、アート君は数日後には回復し無事退院を迎えました。カンボジア人の本質「助け合い」の精神は、素晴らしいなと改めて実感しました （8月）

ANGKOR HOSPITAL FOR CHILDREN

赤尾和美看護師のアンコール小児病院レポート

写真は、AHCへ通っているHIV感染症の子どもたちです。仲間同士の教育プログラム（ピア・エデュケーション）研修を今年も開催し、新たに5名のリーダーが活動を開始することになりました。

アンコール小児病院が開院した当初は、“HIV感染症というと薬もない、知識もない、技術もない・・・”と無いものづくしで、ただ段々弱っていく子どもたちを見ているしかなく、亡くなる度に、そのやせ細った小さな体を前に悔し涙を流したのを思い出します。そして、HIV抗体検査のシステム作りから始まったHIVプログラムも、今年で10年となり、抗HIV剤による治療を始めてから8年です。

何もかも初めてで、「これでいいのかな???」と試行錯誤の毎日でしたが、こうして大きく成長してくれている子たちを見て「まずまずだな」と嬉しい気持ちです。

大きく成長してくれた子どもたちもお年頃を迎え、色々な思春期の問題を抱え始めています。反抗期を迎え、家族との関係がうまくいかなくなったり、HIVに感染している自分に嫌悪感を持ち落ち込んだり、周りと比較して劣等感を感じてしまったり、好きな人ができたことと自分がHIVに感染していることの間に葛藤を感じてしまったり・・・。こんな子たちの一番のネックは「自分だけ・・・」と思ってしまうこと。そこで2009年から始まったのがピア・エデュケーションでした。仲間達のリーダーとなる子たちを養成し、セルフサポートのシステムを構築する試みです。

現在、13名のリーダーが毎日交代で病院にきてボランティア活動をしています。リーダーさんは成人となれば卒業していき、思春期になる子どもたちは毎年増え続けるのですから、この研修は恒例の活動として定着させて行きたいと思います。

現実にこのセルフサポートの活動には、素晴らしい力があるなと感じています。私たち大人の説得にも耳を貸さず辞めてしまったAちゃんへ自分の経験を話し、学校への復学が実現したり、自分も家出をして一人住まいで辛い経験をしたリーダーのBちゃんは、同じように家出をしたCちゃんを自分の家へ住まわせて、いつも怒った顔ばかりしていたCちゃんの笑顔を取り戻してくれました。自分たちの力を信じてこれからも頑張ってもらいたいですね。（10月）

12月１日は「世界エイズデー」でした。毎年、カンボジアでもHIV/AIDSの啓蒙として政府機関が式典を開催しています。その式典でのスピーチの依頼が、AHCに入りました。シェムリアップで長期に渡り小児HIV感染症への取り組みをしているのが認められたということです。

堂々たるスピーチ！

AHCが小児HIV感染症の医療に動き出したのは、2000年のことでした。検査体制もなく、何をどうしたらよいのかもわからない状態で始まったその取り組みも12年の月日を経て、国をリードするほどにその体制を整えることができました。

現在、医師、看護師/カウンセラー、HIV感染症を持つアシスタントで構成される19名が運営にあたっており、抱える患者さんの人数も600名を超えています。働くスタッフにもHIVに関わる”スペシャリスト“としての自覚が芽生えています。

スピーチも立派なものでした！病院、他団体を代表して自らの使命を自信をもって述べている姿に・・・また、自分の子どもの成長を見ているようで、“うぅ・・”と来てしまいました。本当に嬉しい瞬間ですね。（12月）

赤尾和美レポート

日本のテレビでも報道されているタイの大洪水ですが、カンボジアも大洪水です。雨季には時々川が決壊することもありましたが、今回は、川の水位の上昇が早く、引きが悪いという状況で、９月から５回も写真のような洪水が発生しています。訪問看護では船を出して患者さんの家にたどり着くことも多々ありました。現在は、シェムリアップの街中では水は引き、川の水位も下がってきたものの、村では未だに水が引かず、隔離されてしまっている地域がたくさんあります。病院へ来たくても来られない患者さんはたくさんいるのではないかと思います。現に、外来患者数を８月と９月で比較すると約5,000人も少なくなっています。（９月）

３歳の男の子、リアクサ君は、シェムリアップから150キロ離れた村に住んでいます。生後4日目に呼吸困難を起こし、ある小児病院へ連れて行きましたが、「心臓に穴が開いていて、治療不可能」と言い渡されたそうです。希望を失っていた時に、リアクサ君のご両親がAHCのことをあるタクシーの運転手さんから聞き、そのままAHCで受診することを決めました。AHCでの診断もやはり、心臓に小さな穴が開いている生まれつきの心臓病と診断されました。しかし、全く希望を失っていたお母さんに、リアクサ君の病態は手術により回復の可能性ありという朗報が！ 心臓の手術は海外からの心臓外科チームが来る今年1月まで待つこととなりましたが、無事に手術は終了し、術後１週間の入院のみで、退院処方の薬も必要なく退院することができました。

お母さんの笑顔が素敵です

リアクサ君のお母さんは、絶望していたことが夢のように解決し、日々体力を取り戻すリアクサ君を見ることは全く想像してなかったと話しています。「AHCはリアクサが生まれ変わった場所です」と、ご両親はとても喜んでいました。

これでリアクサ君も元気に学校へ通えるようになります。

アメリカからの心臓外科チームの皆さんに、またひとつ笑顔を見せていただけたことに、感謝です。（１月）

活動報告 etc...

グローバルフェスタ2011

毎年恒例となった国際イベント【グローバルフェスタ】が昨年も東京・日比谷公園で開催され、フレンズJAPANも出展しました。10月1〜2日の2日間で、イベント全体での入場者数は約11万人!毎年、記録を更新しており、国際協力やボランティアへの関心の高さがうかがえます。

特に、昨年は東日本大震災があり、多くの方が“ボランティアの意義”や“自分にできること”について考えたり、方法を模索したりすることが多かったのかもしれません。テーマも『絆〜私たちはつながっている〜世界は日本とともに。日本は世界とともに。』という、震災を意識したものでした。

ステージ企画『やってみたい!ボランティア』では、当団体のスタッフ・永野が、ゲストのサンドウィッチマン等と共に登壇!トークセッションを行いました。

フレンズJAPANのブースでは、活動紹介やオリジナルグッズの販売のほか、『クメール語で琴を作ろう』を実施。クメール文字で名前や好きな言葉を書き、オリジナル琴を作るというもので、たくさんの方がチャレンジしてくれました。

よこはま国際フェスタ2011

10月22日〜23日、横浜市の象の鼻パークで開催されました。22日は荒天のため中止となってしまいましたが、23日は好天に恵まれ、この1日のみで約2万8000人の来場者があったと報告されています。

フレンズブースでは、当フェスタが企画した“子どもボランティア”の受け入れを行い、「クメール語を書いてみませんかぁ」「琴をつくりませんかぁ」というかわいらしい声が響き渡りました。

琴コーナーは子どもたちに大人気！

巡回写真展『アンコールの空の下』

多くの方々のご協力により、無料写真展を開催することができました。

10月21日〜22日	福岡女学院大学「葡萄祭」
11月6日	長崎ウエスレヤン大学「2ドル祭」
11月16日〜27日	福岡県国際交流センター
2月14日〜3月4日	ナガサキピースミュージアム
4月10日〜4月22日	INSTEP LIGHT（下北沢・インステップライト）

※今年の秋も、国際イベントに出展を予定です。ボランティアさんの募集を行いますので、よろしくお願いいたします。
※巡回写真展『アンコールの空の下』を行ってくれる施設、グループを常時募集しています。ご興味がある方は、事務局までお問い合わせください。

安田菜津紀さんによるミニトークイベント

巡回写真展を行った東京・下北沢のワールドカフェ&バーINSTEP LIGHTで、写真展会期中の4月15日、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんをお招きし、ミニトークイベントを行いました。店内は満員御礼の大盛況！フレンズとのつながり、カンボジアや震災後の東北で体験したこと、活動の原動力など素敵なお話をうかがうことができました。

安田さんのお話に真剣に聞き入る参加者のみなさん

ニュースレターが新しくなりました。

前回、30号を迎えたのを機に、ニュースレターをリニューアルしました。カラー印刷にし、より読みやすく、親しみやすいデザインになることを心がけて制作にあたっています。支援者様からも、好意的なご意見が多数寄せられました。

・以前は「時間がある時に読もう」と思っていたが、新ニュースレターは、届いてすぐに読みたくなった。
・とても読みやすい。読みやすい冊子を作るのは、制作者サイドとして当然の義務だと思うので、これからも努力してください。
・ビジュアルに訴えることは大事。団体としての姿勢や活動をきちんと伝えるためには、より人目を引く方法を用いるのは正しい。
ありがとうございます。また、一方で、批判的なご意見もいただきました。
・カンボジアの貧しい子どもたちに少しでも多くの支援が届くように、その他のお金はできるだけ節約してほしい。
もちろん、心がけております。前回もご説明しましたが、ニュースレターの印刷費は、これまでのモノクロのものよりも、新しいカラー版の方が安くなりました。少し具体的にご説明すると、印刷会社を都内から地方の会社に変更しました。仕様も、3つ折りをやめ、A4の大きさのままとしました（3つ折りは加工代が加算されます）。ここで問題となるのが送料ですが、郵便ではなくメール便を使うことで、これまでと同料金で送ることが可能となりました。

ニュースレターへのご意見・ご感想、事務局へのご要望など、これからも、忌憚のないご意見をどしどしお寄せください。

支援者紹介

SUBAI（スバイ）

クメール語で「楽しい」を意味する「SUBAI」というプロジェクトを行っているグループは、その名の通り、いつも楽しみながらご支援を続けてくださっています。中心となっているのは、Muscle7という名のロックバンド。普段はそれぞれの仕事を持ち、趣味でバンド活動をしてきたメンバーたちが、自分たちのライブで得た収益や募金を、フレンズJAPANに寄付しているのです。

きっかけは、仕事で出会った在日カンボジア人の青年たちと意気投合したことでした。バンド活動のことに話が及ぶと、カンボジア支援のイベントに出演してみないか、と誘われ、そのイベントがSUBAIのスタートとなります。バンドのメンバーたちの中で「もっとやりたい！」という気持ちが芽生え、カンボジア人青年たちが“母”と慕うペン・セタリンさんに相談。そこでフレンズを紹介されたのだそうです。ペン・セタリンさんは、日本やカンボジアでの大学講師、小説家、カンボジア料理店経営、カンボジアに日本の絵本を紹介するNGO活動など、幅広くご活躍されている方で、フレンズのイベントにもご出演いただいたことがありました。

ささいなきっかけから、のめり込むように支援活動に力を入れるようになったのは決して意外なことではないと、メンバーの方々が口をそろえて言います。元々、人のためになることを何かしたいという気持ちが強くあったものの、方法や手段がわからないでいただけだったのだと。SUBAIを立ち上げ、親交のあった他のバンドにも、趣旨を伝えた上でライブへの出演を依頼すると、「ぜひやりたい」「そういうことがしたかった」との声が多数集まり、参加バンドの数もだんだん増えてきているといいます。その中のひとつ、ONCは、特に熱心に関わってくれるようになり、今では一緒に企画や反省も行うまでになっているのだとか。

ライブを開催する。募金が集まる。募金額に驚く。素直に嬉しい。それが次へのモチベーションになり、もっとやりたい、続けたいという気持ちにつながる……というのを繰り返す一方で、チャリティをうたうことへの責任も、強く感じているとのこと。寄付をしてくれるお客さんに対し支援結果をきちんと伝え、信頼される活動でなければいけない、きちんとした姿を見せなければいけないと、いつも意識しているそうです。

「こうした活動は続けることが大事だと思う。楽しみながら続けたいし、賛同してくれるバンドが全国に広がり、全国ツアーができたらいい！」と、意欲的に語ってくれるMuscle7とONCのメンバーの皆さん、いつもありがとうございます。全国ツアー、期待しています！

SUBAIホームページ
http://sky.geocities.jp/tin200620002003/index.html

ご支援について

カンボジアの子どもたちを支援するフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANに皆さまのご協力をお願いいたします。

ご支援の方法をお選びいただけます。

● 一般賛助会員 ： 年会費１口6,000円
● 学生賛助会員 ： 年会費１口3,000円

・口数はご自由です。
・賛助会員の皆さまには年2回発行のニュースレターをお送りするほか、報告会やイベントの案内をお届けします。

● 一般寄付

・金額・回数はご自由です。
・ニュースレターや報告会、イベントの案内などをお送りします。

※寄付者の皆さまのお名前を、病院内に設置しているネームプレートにローマ字で記載します。ご寄付の際にはフリガナをお知らせください。

● 正会員 ： 年会費１口12,000円

・ニュースレターや報告会、イベントの案内などをお送りするほか、年１回の定時総会において、団体の意思決定について参加していただけます。（委任状の提出も可能です）
※当法人が定める入会申込書を別途ご提出ください。

ご寄付を希望される方には、専用の郵便口座の振込用紙をお送りしております。ホームページのフォーム、もしくはお電話でご請求ください。郵便局や銀行に備え付けの用紙を使っていただいてもかまいません。

● 郵便口座

加入者名：
特定非営利活動法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
振替番号：00160−0−546217

● 銀行口座

銀行名：**三菱東京UFJ銀行 中目黒支店**
口座番号：**普通預金 0420041**
口座名：**トクヒ）フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダージャパン**

●クレジット決済

ご自宅からインターネットを通じ、クレジットカードでご寄付ができます。フレンズJAPANのホームページ**www.fwab.jp**にアクセスし、「オンライン寄付」から手順に沿ってお手続きください。

※特定非営利活動法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANは2011年8月1日より認定NPO法人と認定されました。
ご寄付には寄付金控除の可能な領収証を発行いたします。

※銀行からのお振込みや、ご自身の郵便口座より郵便振替で直接送金される場合、事務局にはお振込み者のお名前しか通知されませんので、領収証やニュースレターをお送りすることができません。大変お手数ですが必ず、お名前（フリガナ）、郵便番号、ご住所をお知らせください。

知ってる？カンボジア！ 投資編

なんと普通の家の裏庭です

昨年７月、国内初のカンボジア証券取引所（CSX）がオープンし、新規株式公開の準備が進められていたカンボジア。度重なる延期の末、いよいよ４月18日には「プノンペン水道公社」が第1号上場となりました。
ASEAN諸国の中でも「希望と発展の流域」といわれるメコン河流域のベトナム・ラオス・カンボジアの３国は、金融投資のみならず、燃料・観光・人材と豊富な資源を有し、今、世界の注目を集めています。
経済開発に伴う首都プノンペンをはじめ、シアヌークビル、バッタンバンの街の変ぼうを見ると少しさみしい気もします。しかし、海外企業の進出によって雇用の確保、インフラ・交通・法整備が一気に進んでいくのでしょう。

カンボジア国民の多くにとって「投資」は、まだまだ先の遠いお話ですが、財テクのひとつとして昔から行われているのが「ワニ」の飼育。自宅裏の屋根もないただ四方を煉瓦壁に覆われた場所に30匹40匹、多い人では100匹以上ものワニを飼っています。トカゲほどの子どものワニを１匹$20～30ほどで購入し、成長したワニはハンドバックなどにするため、お土産物屋さんなどに売られていました。現在では国内の需要も減り、中国へ輸出しているそうです。
野放しで散歩をさせる必要もない、エサも１週間に１度与えるだけで、飼育はとても簡単だそうです。それにしても日本人としては、エサ代も馬鹿にならないだろうし、危険ではないか、と気になるところです。

事務局より

昨今は、企業と同様、NGOも社会的責任を果たすべく、活動内容や成果、今後の計画などを説明していくことが求められています。こうした説明責任を指す言葉が“アカウンタビリティ”です。
国際協力NGOセンター（JANIC）が実施する“アカウンタビリティ・セルフチェック2008”マークの取得は「組織運営基準」、「事業実施基準」、「会計基準」、「情報公開」について適正にチェックが行われたという証であり、信頼性の高い団体であることの証ともなります。
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPANは今年２月に、このアカウンタビリティ・セルフチェック2008のマークを取得しました。
これからも、組織運営や事業活動について、より信頼される団体となるよう努力していきます。

Accountability
Self-Check 2008

これは、JANIC の
「アカウンタビリティセルフチェック2008」マークです。
JANIC のアカウンタビリティ基準の 4 分野
（組織運営・事業実施・会計・情報公開）
について当団体が適切に自己審査したことを示しています。

FRIENDS WITHOUT A BORDER
www.fwab.jp

認定NPO法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒153-0064 目黒区下目黒 1-7-5-203
Tel / Fax： 03-6421-7903
friends@fwab.jp

アンコール・フレンズ基金 福岡事務局
〒811-0213 福岡市東区和白丘2-2-75
福岡和白病院 総務課内

Friends Without A Border
1123 Broadway, Suite 1210
NewYork, NY10010 USA
Tel：212-691-0909
Fax：212-337-8052

Angkor Hospital for Children
PO Box 50, SiemReap, Cambodia
Tel：063-963-409
Fax：063-760-452